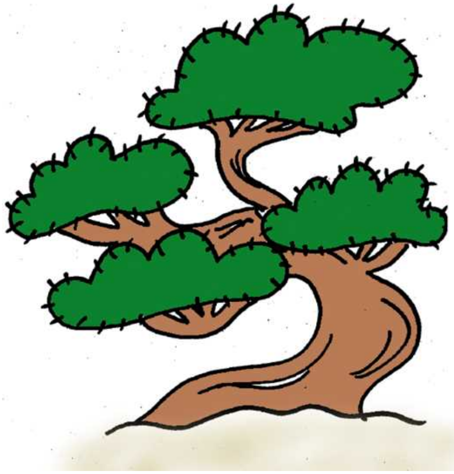


つがるの昔っこ（昔話）⑥

お松の歌詠み

（津軽弁）

国土交通省　東北地方整備局

岩木川ダム統合管理事務所

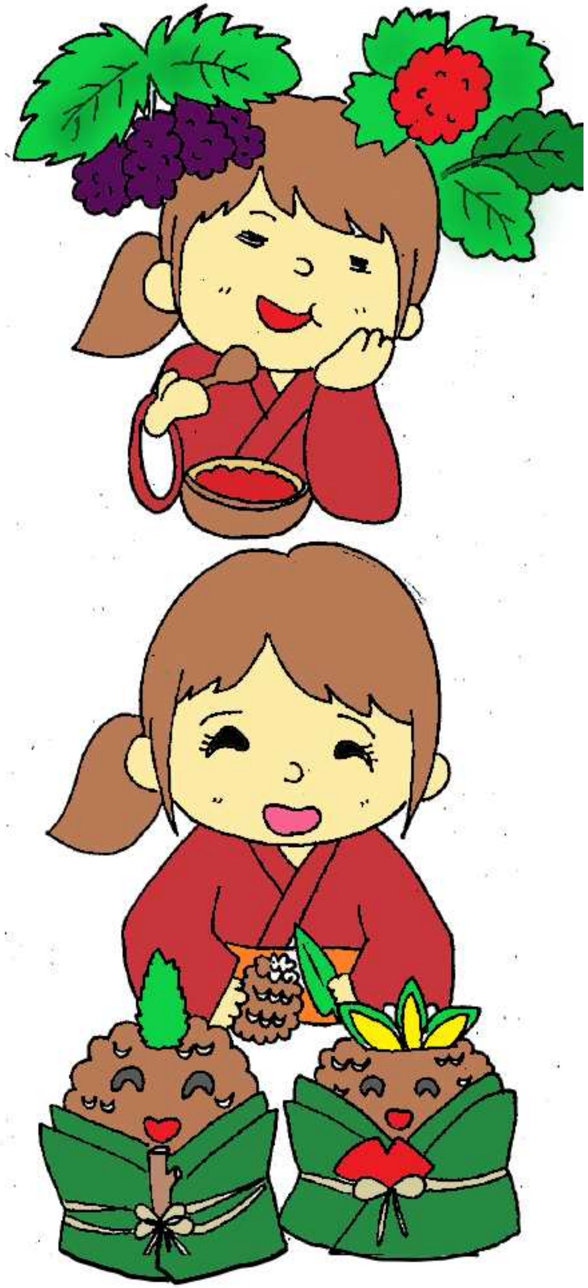
イラスト：やざわ　ゆな

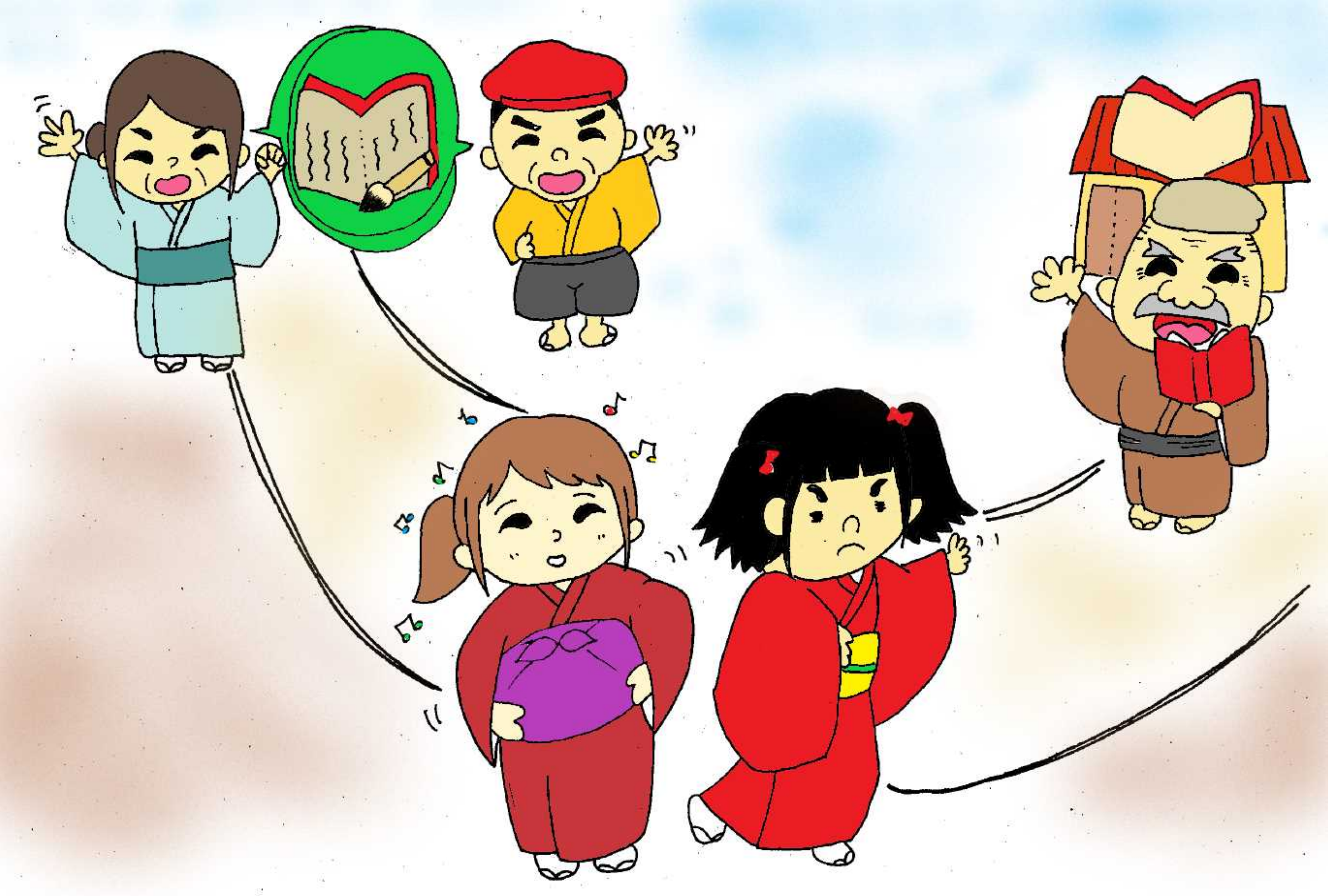
カラーリング：つしま　けいこ

昔々、ある家さ、ほんとの子ど、まま子ど居であたど。ほんとの子の名前コはお絹てしてせ、まま子ァ、始めは、ちゃんとした名前コもあったんだべたて、誰も本当コば呼ばねで、ただ、捨て、捨て、て呼ばてあたど。

親ァ、ほんとの子のお絹さだば、毎日めもの食（か）へで、いいべべ着へで、真綿コさくるんにして大事にしてらばて、まま子の捨てはいっつも皆の食い残しの飯（まま）ど古着（ぼど）着へらえで、毎日毎日、朝間早ぐがら夜遅ぐまで働がさえであったど。

　お絹は、ホレェ、小せえ頃がら、お菓子てば、お菓子、玩具（おもちゃ）てば玩具、欲しい物ァ何でも買って貰てあたばて、お捨ァ、桑の実コだの、野いちごだの食って、松ぼっくりの人形コさお笹の葉の着物コ着へで遊んでらんだどよ。それでも根ァ丈夫だわらしであったんだびょん。
　お絹。いっつも熱出したり風邪引いだりしてるのに、捨ァは病気一つさねで育って、そしてるうちに、この娘達ァ二人共、十歳になたど。





　十歳になった時、お絹ァ、学問も身につけさへねばまいねず事で、町のお師匠様さ読み書ぎ学問ば習いに行ぐ事になったんだど。それがら、捨、お絹のお供ばして毎日町さ行く事になったんだど。
　家で朝がら晩（ばげ）まで荒仕事をしてるのさ比べれば、お絹のお供で町のお師匠様の所に出がげのァ楽しーくて、楽しーくて仕方ねがったど。

　お絹、部屋で読み書ぎしているうぢは、
捨ｧ、廊下でまってあったんだども、捨も部屋がらもれ聞けでくるお師匠様のお話しば熱心に聞いでらど。そのうぢ、学問ずものｧおもしれえもんだど思えるようになったど。
　お絹の手習いの反故（ほご）になって捨てられだ紙もそっと拾って懐さ入れできて、それば広げで一人で夜中ね習字の読み書ぎの真似コもしたど。

お絹は物さ飽ぎやすい、わがままだ娘で、紅白粉（べにおしろい）だの髪型だのの事だば熱心だばて、学問の方だばすんぐ飽ぎがってせえ、お師匠様におさらいばしろって言いつけられできても、家さくらば何（なん）もしねで、勉強の道具ば、ぶっとばしておぐんだど。捨ァ、その道具ば片付けながら、今日聞いだ事ば頭の中で繰り返しおさらいしたど。

　お絹と捨てが十五になった時だ、この在の秋の収穫のお祭さ、領主のお殿様がおいでになることになってせ、さあ、殿様がおいでになるずもんで、祭りの仕度ｧいづにもまして賑やかだもんになったんずおんな。　そしてらどごさ、お城の役人来てせ、
『祭りの余興として、村中の娘達は殿のおん前で歌詠みをするように』てふれだど。
さあ、これで又、村の中は一騒動だ。

手踊り上手、民良い自慢の娘達だばいるばって、歌詠むず娘だば、そたらにいねえ。
ただ一人、お絹の母親は『しめた』ど思ったど。娘ば町のお師匠様の所（どご）さへ通わへで、読み書ぎ手習い一通りの事はさへだ。お師匠様は風流人で、歌だのや俳句だのも作らへで手直ばしてでける。これあ、殿様の前で歌詠むのｧ、村中で家（おえ）のお絹の他はねえ。お殿様の目さ止まって、お城さあがるようになったりへば大変な出世だど思って、わくわくどなったど。

　さあ、いよいよ祭りの日ァ来た。この日は、んにゃ、見ごとだほどの秋晴れのいい天気で、お城の殿様も大勢の家来やお女中衆ば連れで、村祭りの見学にきたど。

　村中は一段とウキウキどなって、お殿様ご一行さ、若え娘達の唄コ聞がへだり、アバ達の踊りコ見（め）へだり、若者共（わげものんど）の相撲見（め）へだり、んにゃ、何もかも賑やかに盛り上がったど。

　さあて、それもみんなひと通り終わったどごで、殿様、そばの家来さ声かげだど。家来はかしこまって退（さが）って行ったけァ、やがて、大（で）っただお盆の上さ大皿ばを乗へで、その大皿の上さ、真っ白だ塩ば山盛りに盛って、その真ん中さ松を立てだものば持ってきたど。それァせ、ほれ、お歌の題であったど。

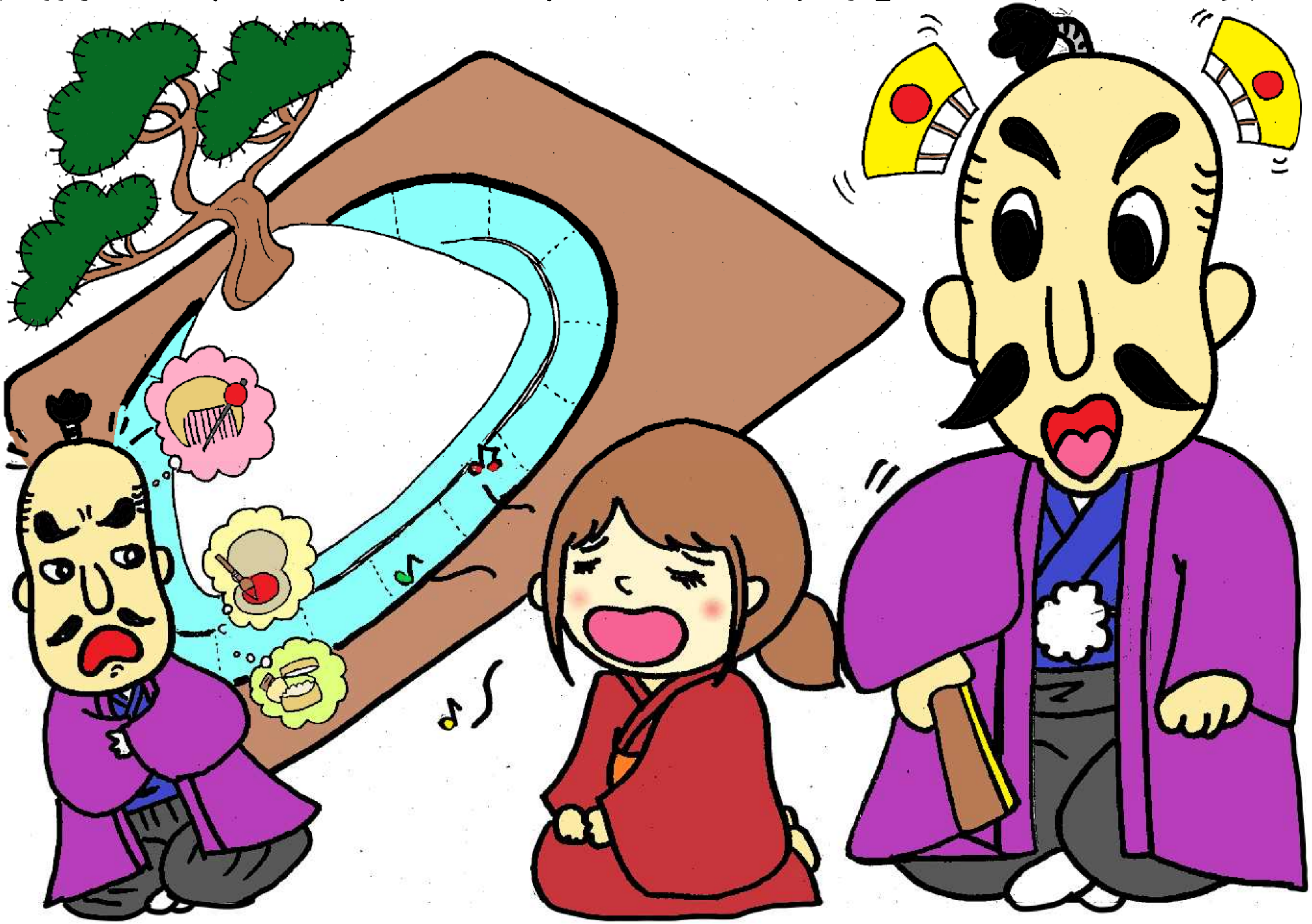
殿様、『これこれ、この村の娘共、誰かこれを題にして歌を詠むものはおらぬか？』てしたど。
さあ、お絹の母親はこの時とばり、娘の背中ばど突いで『絹、さあ、行げ行げ、さあ、詠め、詠め』てしたど。お絹はこの日とばかり華やかな着物ば着てあたど。しずしずとお殿様の前さ出で、『こほん』と咳コしてがら一首詠んだど。

『お盆の上に皿がある　皿の上に塩がある　塩の上には松があるー』て詠んだど。それ聞いた殿様『それでは歌にならん。誰ぞもっと良く詠む者はおらぬか』てしたばって、ズラーッと居並ぶ村の娘の中さも、殿様の前で歌詠んだ者ｧ、お絹ば除いで誰もいねえ。そのお絹の歌を『それでは歌にならん』てされだもんだどごで、さあみんな、下向いて、シーンとなってまったど。

　殿様、だんだん不機嫌になってきた。そばの家来がそれを見であわでで、『こらこら、誰かおらぬか、誰でもよいから一首詠め、詠む者はおらぬか、おらんのか』てしたど。したきゃ、娘達の列の端の方から、『あのう、だれでもいいってへば、ほんとに誰でもいいんですべが？私（わだし）でもいいんですべが？』みんなその声の方ば見だきゃ、汚れてはいねばて、粗末な木綿の着物を着た娘コ立ってあたど。

お絹の家の捨てであったど。村の衆、それ見てざわざわとなたばて、ご家来がホットしたように『おっ、誰でも良い、誰でも良い、お前は歌が詠めるのか？ではここに参って、一首詠んでみよ』てした。

　捨ｱ、おそるおそる皆の前さ出で、皿の塩の前さ座ったど、。機嫌が悪ぐなりかげでらお殿様、、見れば目鼻立ちいい娘だばて、着ているものは粗末だもので、祭りの日だというのに、櫛、かんざしも無く、おしろいもつけねで、紅もさしてねえ。そうした娘が歌を詠むずだもんだどごで、殿様大変興味深く思われで、『お前が一首詠むと申すか？よしよし、では遠慮無く詠んでみよ』てしたど。　そこで、捨、うって目つぶって、フゥーッて一息吐いでがら、詠んだど。
『さらさらとさら（皿）につもれる雪の山　　雪を根にして　育（はぐくむ）む松かな』それを聞いだお殿様、扇子で腿（よろた）ばバンと叩いで『んむ、見事』てして、たいした褒めだど。



殿様、この捨ばすっかり気に入って、お城さ連れで戻ったど。お城では殿様が粗末だ村娘さ歌詠ませで、それば連れて戻ったずァ、奥方様の耳さも入って、奥方様も珍しがって出てきて、縁側さ座って庭でかしこまっている田舎娘さ『この庭の木を題にして、一首詠んでみよ』てしたど。

捨、しばらく考えでらばって、その後で、
『村里に踏み捨てられし松ぼくりー　　末はめでたき　松のその色ー　』て詠んだど。
奥方様よろこんで、『捨という名はよろしゅうない。これからはお松と名乗るが良い』てして、

お松ばお姫様のお相手にして、歌ばかりでなぐ、行儀作法も学ばせで、茶、華も薙刀だのも稽古さへで、やがて昔の村娘捨は、お松様て呼ばれる立派だご身分になったんだど。

おめだぢも・・・・
何でも機会があれば逃（の）がさねで勉強しておぐもんだよ。
それは人生で、いづがきっと役に立つ事ァあるもんだはでのぁ。

とっちばれ